

京都教区時報

小教区の頁—岩滝教会
特集—四旬節教書
連載—コミュニケーション年にあたって

第83号

発行所

京都市左京区に王門通新高倉東入

京都カトリック教理センター

広報室(Tel761-9095)

編集責任者 村上透磨

編集 部 教理センター

田中司教認可

私の夢見る教会

「私の夢見る教会」とは、すべての信者がキリストにおいて一つにつながれ、一つの家族のような親しみと愛を持って接し、活動することができ、まわりの人々からも親しまれ、気軽に訪ねてもらえるような教会である。

(中村 豊)

夢見る教会の理想とは？ 愛と祈りと行ないのある所、そしてこれらが行なわれる所を全て教会と呼びたい。即ち道より求め、真理を得、生命の働き——現教会のすばらしい全

私の夢見る教会



ての所から、人との交わり、分かち合いを通して、今の青年一人一人が何十年か後に赴く所、そこが教会という場でありたい。

(大西 康孝)

個人的立場では、聖歌隊の充実を掲げたいです。教会が聖歌隊の重要性をもっと認識し、常に美しい音楽を求める姿勢を持つてほしいのです。皆さん、聖歌隊は教会の顔だと思いませんか？

(西村 洋子)

私には、おじいさん、おばあさんが何人も

います。お父さん、お母さんが何人もいます。兄弟姉妹が、多勢います。教会に集まるみんなが、ひとつの大きな家族です。私にとってひとりひとりがかけがえのない大切な人ばかりです。——そう願っています。

(才木 淳子)

月並な言い方ですが、老若男女誰もが、世代差やハンディキャップを越えて、互いに喜びも悲しみも全部分ち合って行ける教会です。言わば、少しばかり大きめの「家族」のような愛の共同体です。

(中嶋 正幸)

京都は学生の街である。彼ら学生の多くは忙がしい日々を送っているのであるが、中には周囲の環境になじめず無為の日々を過ごす者もいる。そんな彼らを教会に迎えて共に青年会活動を盛り立てていけたらと思う。

(川村 卓士)

和気合い合いとしていて、なごやかな雰囲気のある、誰でも入っていきけるような教会、そして苦しい事、うれしい事、みんなで分かち合えるようなそんなファミリーな教会……

(河岸 深雪)

神の友、神の家は愛の家。神への愛が神を愛するが故にこそ、自らの隣人に迄伸長し浸透して行く愛、虚飾や義務でなく、神を愛する自由な魂たちの集まりは温かく全ての人の心を招かずにいられない。時には皆でビクニツク。

(山岸 邦彦・土館 康子)

昭和57年12月26・27日、京都教区南部高校生会が、衣笠教会において行われた。将来の教会はこの様な青少年の双肩にかかっている。この将来の希望である彼らに、彼らの教会の夢を語っていただいた。

1月18・25日 キリスト教一致祈禱週間

1月22日(土) MM女学院プール地鎮祭

1月30日(日) 信徒養成コースOB研修会(洛星宗教会館)

1月31日(月) 司祭評定例会

2月6日(日) 日本26聖人殉教者記念ミ

教区短信



サ(小寺ビル)

2月16日(水) 灰の水曜日(四旬節)

2月21日(月) 教区付邦人司祭月例会

2月23日(水) ND高校卒業式

2月24日(木) 聖母高校卒業式

2月26日(土) セントヨゼフ高校卒業式

司教修道士懇親会

1月4日 於河原町教会



懇親会は70余名の出席のもとにミサによってはじめられた。今年はコミュニケーション年にあたり、一致をテーマに選ばれ、一致の源泉は神であること(イザ6・1-8)その心構え(フィリッピ2・1-4)一致の源泉である復活したキリストとの聖体における交わり(ル24・13)が朗読された。ミサ中田中司教は、共に福音への奉仕に召され派遣された者であるとの自覚を呼び起こし、昨年は確かに松田、藤堂、バイオン師等の相次ぐ死という試練の年でもあったが、多くの貴重な体験の時でもあった。人は死に定められた者として虚無的な考えをもつ人も多いが、その様な人の間にこそ福音は大きな力をもつだろう。何故なら、キリストは「私達と共に在らず」神だからだ。日本司教団は今年「福音宣教にすべての神の民の参加」を呼びかけ、アジア司教会議の目標は「アジアにおける信仰共同体としての教会の姿」である事。平和への実現の努力、特別聖年の年として信仰共同体としての一致を実現していく様に努力しよう。又ウィジョン実現に向けて

少しづつ努力がはじめられている事を喜び期待する旨の挨拶があった。
第二部はマリスタ会、モーケンパー師の司会による懇親会が催され、二時頃閉会。尚夏には、話し合いを中心とした研修会がもたれる予定である。

ウォーカソン始末記

先日お目にかかることが出来、皆さんのお働きに沢山教えられて帰って参りました。毎日小さな子どもたちと楽しい学校生活をしていますと、つい自分たちのことのみ、自分たちがなんとか日々事なく過ごしていくことに目をうばわれてしまっています。ウォーカソンを知ったことは私にとって大きなよこびです。大きなことはできませんが、少しでも思い、まわりの方々に呼びかけ、ご協力願いましたので、お送り致します。Sr吉村宣子(京都調布 汚れなきマリア修道会)
先だってはフィリッピンの司祭の方をお連れ下さり、現地の状況の厳しさを改めて察し、何かお手伝いさせていたたくしあわせをありがたく思っています。
お預りしたウォーカソン参加証、京都までまいるわけにもいきませんので私が五日間乗り物なしの生活をする事に決めまして、皆様に協力していただきました。スポンサーになってもらうようお願いしてまわったりするのは、内向的な私には初めての経験で、最初はどうなることかと不安ですが、本当に神様は全てをよくしてくださいます。
私も丁度子供が七・五・三にあたり、晴

着を買おうかと迷っている時でしたので、幸い余分のお金がありました。晴着は私の手作りジャンパーズスカートに更え、そのお金を含め合計四万五千円をお送り致します。お役に立てて下さいませ。
武井志津子(福山教会)

ウォーカソンに参加させて頂き、色色お世話になりました。幸い好天に恵まれ、沢山のスポンサーの方々の善意を一身にしまして、京の秋色をめでながらゴールまで歩く事ができました。

改めて同封の参加証を見ながら、私が如何に多く善意の人達の中で暮らさせて頂いているかということをつくづく感じ感謝の思いで一はいでございませ。合計額九万七千円を送らせて頂きました。
浜瀬芳子 松坂市(70才)

西舞鶴でも



昭和56年度のウォーカソンに参加した舞鶴日星高校2年生、奥村あけみさん、森下照子さんのお二人は、参加した感動を思いおこしながら、昨年11月10日、同校宗教部からウォーカソン運動実施の呼びかけのプリントを作成、登校生全員にアピール。11月20日(土)西舞鶴駅から西舞鶴教会までの8kmを37名の在校生、4才の男の子、おじいちゃん一人を加えて元気にスタート。あ

いにくの小雨ではあったが決行。フィリッピンの無医村に鍼師を」とかかれたシーツの横断幕を、奥村さん、森下さんが両側から掲げ、一時五十分に町の中央に繰り出し、動いている募金運動」と町民の注目を集めた。ゴールの西舞鶴教会では、日星高校の裏晶とれたさつまいものふかしたのが参加者に振舞われ、心までフィリッピンの兄弟への愛を沸きおこさせ、暖められた。

スポンサーになった生徒は60人、募金額は約12万、ウォーカソンの二粒の麦は舞鶴にも落ち伸びてゆきそうである。
ウォーカソン募金総額 12月26日現在
金三、五九七、一九四円
募金まだの方は早くお届け下さい。

聖歌隊交歓会 於西陣

10月31日、西陣教会では、松本三朗師を招き、典礼研修会を行った。一つの実りとして11月23日四時三十分より「聖歌隊交歓会」を西陣で行い今後ともこの様な交歓会の輪を広げたいとの話し合いがなされた。南信協の協賛によるこの会は、西陣、小山の聖歌隊に、河原町、衣笠等有志の参加によって行われた。
夫タアヴェヴェルム・パニスアンジェリクス。典礼聖歌の発表。みんなの合唱をもちこんだ発表の後、話し合いの中で、この輪を広げていくために各教会の聖歌の事情をアンケートしよう。

6月か11月に交歓会を持ちたいとの結論を出し6時30分頃閉会した。
「歌うものは二倍祈る」という諺がある。

お知らせ

マリッジ・エンカウンター

へのすすめ

この集いは、夫婦がお互いの中に働く神様の御計画を体験する集まりです。他の黙想会や練成会と違い、夫婦二人だけが対話を続けながら、自分達の結婚が深く神様のほからいの中で計画されたものであることに気付きます。そして自分達の家庭が小さい教会として神様の深い愛を世に証しする事になる事を自覚させてくれます。これは教えられるものではなく、自ら覚悟し体験するものであるところに特長があり、その後も日常の暮らしの中で生き生きとしたものとなる事が、これにあづかった夫婦のうちに実現していく様です。これはスペインのカルボ師が「組の夫婦に出合った事からはじめられ、日本にはタナン師によって伝えられ、奈良教会のオヘール師を中心にして行われ、多くの成果をおさめています。今四チームが旅するチームとなる予定を組んでいます。日程は次の通り。

3月19日(日)21日(月) 三重県津
6月17日(金)19日(日) 京都 北白川教会
10月8日(日)10日(月) 舞鶴天台修道院
参加費約一万円

参加希望者は奈良教会(〇七四二一一六―二〇九四)まで。尚この集まりに司祭修道女も参加出来ます。更にこの運動は青少年対象のものもあります。

コルベ神父列聖記念
講演と映画の夕

時、2月19日(土)午後5時20分
所、大阪毎日ホール(地下鉄四ノ橋線、西梅田駅下車5分)

プログラム

映画、「アウシュビッツ愛の奇跡」

講演、曾野綾子「他人のために命を捨てられるか―聖者コルベ師の生涯」

入場料、前売券千円(小中学生七百円)

入場券は、各プレイガイド、梅田阪急5Fホーリーコーナー、神戸および園田聖パウロ書店、北浜聖心書房で発売

又往復はがきに住所、氏名、年令、職業、電話番号を名記し、2月10日(水)迄に必着。返信はがき持参者は前売料金で入場可。

干範尼崎市東園田町九―十五―十一、女子パウロ会

当日券千二百円(小・中学生九百円)

マリスト会人事移動

●83年1月より管区長にルーニー師

前管区長ウィックス師は一年余り帰国

●登美が丘教会 ヒル師(4月まで)

●大和郡山教会 ルーニー師(公式事務は奈良)

●西大和教会 グレイ師(83年3月迄)

カーティ師1月から4月迄難民センター専従

その間大和高田より

●小山師は83年5月まで東京

お祈り下さい

西牟田師 教会の窓のガラスを直すため誤って転落、重傷です。京都では特に希望の家、伊勢教会等で活躍

主よとわの安らぎを

●M・デニヤン師、ロスアンジェルスで帰天。1月2日。デニヤン師創立になる桑名教会で追悼ミサ。1月7日。

●Sr米屋―御母堂米屋マリア・文子

Srジョーン・モレム 御尊父

●松本三朗師御尊姉

都の聖母像複製

聖フランシスコ・サビエルの遺志を受けつぎ、フランスのロバン師が造らせ、一八六五年、ピオ九世が祝別。日本に送られた「都の聖母像」が、河原町教会に保存されている事を御存じの方があると思う。この複製像が、実物と変らぬ位立派に出来上った。もしこの複製像をほしい方があれば、三方円でおわけする事が出来るので、御希望の方は、河原町教会まで申し込んで下さい。

高御像は、ベリヨン師が日本に持参、京都入りを果たせず、ビグルー師の手によってまだ宣教のゆゑにされていなかった京都をマリア様の手にゆだねるため、友人の日本人青年の手を借り、京都を一望出来る將軍家にうめられ、数年後ベリヨン師により発掘されたものである。

南信教婦人部バザー報告

昭和57年11月28日 於河原町教会で開催。老人いこいの家、建設資金作りの為のバザーを催しました。純益は約五十四万円。皆様方の暖かい御協力と御援助を賜り厚く御礼申し上げますと共に感謝しております。これを土台に毎年続けていきたいと思ひます。遠い道のりではございますが、今後とも皆様の御支援と御協力を賜りますよう、よろしくお願ひします。

あなたの良き隣人として

カトリック御葬儀・貨物一式(仏式可)

聖ヨゼフ葬典社

パウロ 杉下 安雄

(西院教会所属)

京都市右京区西院寿町2-3
電話 (075) 312-7829
(075) 771-7577

製菓材料・舶来食品
和洋酒・修道院製クッキー
ミサ用ブドー酒

タキノ

〒604 京都市中京区錦小路通鳥丸東入
電話 (221) 0976-7

司教の足どり

11月～1月



11月

7日 田園調布サンモール代表、大阪 OFM代表来訪。

18日 「人間ドック」第一日赤。

20日 南勢特老訪問(藤堂師母上ほか) 松阪教会墓参。

21日(日)松阪教会堅信ミサ。津・新聖堂 献堂祝別ミサ。

23日 教区創立記念日。H弁護士らと面談。教区修女連の集い(唐崎)。

24日 富沢司教訪洛(数日間)。

29日 諸宗教委事務局会議(東京) 司教協議会開始。12月3日まで。

12月

4日 H大僧正来訪(諸宗教)。

5日(日)河原町教会ミサ。同壮年会と昼食会。教会学校教師会代表。

7日 神学生養成担当者会議。N平和財団代表来訪。

9日 教区内カトリ幼連園長会議。

10日 I教会代表者らと面談、工事契約締結。

11月 裏千家ミドリ会員らと面談。

12日(日)青谷教会堅信ミサ。

13日 諸宗教委員会。東京神学院長と面談。

14日 教理センター理事会・忘年会。

映画「典子」観賞。

15日 K大僧正来訪。聖ヨゼフ(ウチタ)管区長来訪。

17日 神学生養成担当者会議。

19日(日)宮津教会ミサ。宮津曉星幼稚園新園舎祝別落成式。

21日 司教叙階31周年目。

22日 諸宗教事務局。東京神学院常任司教委員会特別会議(東京)。

23日 妙法院(三十三間堂)門主の本葬に参列。米田SJ二名来泊。

24日 来訪者多数。市民Xマスミサ。

25日 深夜壮嚴ミサ。

26日(日)H弁護士と面談。

27日 K神学生と面談。教区付邦人司祭月例会。神学生養成担当者会。

28日 古屋司教見舞。

31日 教区内司教有志の集い(洛星) ヨゼフ会(カロン)総長・副総長・管区長来訪。総本山知恩院へ除夜の鐘を見学。

'83 1月

1日 正月元旦ミサ。鏡割りetc。

2日(日)公現ミサ。神の園訪問。

3日 伊語祝電発送(バチカン)。デニヤン師死去の報(2日NYにて82才)。

4日 司教評臨時会議。教区内司教修道者新年ミサと昼食会。H弁護士と面談。

5日 来訪者多数。H弁護士を囲む会議。

6日 来訪者多数。古屋司教も来訪。

市民クリスマスの集い

7日 小林聖心中高教職員新年研修会とミサ。大阪ヨゼフ会本部訪問。

9日(日)女子カルメル会・衣笠墓地・聖嬰会訪問。CLC研修シリーズ「社会に開かれた教会」(安藤師講話)に参加。

10日 S修道会代表来訪。ND理事会。

京都市の中心にある河原町教会には今年、クリスマスに一般市民の深夜ミサ参列への希望が多数ある。そのため十三年前までは信徒にまで入場券を発行して、席を確保するなど苦慮していたが、'68年に行われ、大きな成功をおさめたキリスト教協議会による市民クリスマスが、'69年の教会紛争で中断されたのを契機に、深夜ミサに先立って、カトリック単独でクリスマス市民の集いを計画、実行したが、大成功であった。やがて市民の集いには、ミサそのものを祝い、その後キャンドルサービスを行う形になり、若者を中心に千名を超える人々が集う様になった。又参列者達も敬虔に与り、途中の退堂者も殆んどなくなり、九割以上未信者と云う参列者が共に歌い、祈るという驚くべき状況がうかがえるようになった。

昨年も七時半開始というのに六時すぎから人々が詰めかけ七時には満席。立錫の余地もない程になった。聖堂内には七百余名の人が入り、千百部作ったパンフレットも全部出しつくし、前庭は勿論一杯、数百名の人々が参加を締め外なかつた。これも種々の情報機関の自発的なPRによるものであった。この集りにはパンフレットとともに、アンケートも渡し、ミサ後記入してもらった。アンケート回収率は五二九人と近年最高となった。内訳は男性一五八名(中・小学生十五名・高三・大学六四 社会人七一)女性は一三六五名(小四九 中十二 高二五 大学九九 社会人一八〇)であった。

集いがよかつたと答えた人、男性一〇八 女性三二〇 まあよかつたが、男性四六 女性四二 来る程でもなかつたという答えはなく、一寸物足りないが男女十一名であった。

内容については、ムードがよい、ミサがよい、説教がよい、聖歌がよいと肯定的なものが多く、期待はずれ、ミサが判らない、説教がいやと否定的に答えたものはごくわずかであった。

今一つの問いは、キリスト教についてであるが、興味がある人、男性六九 女性一七五名興味なしと答えた人は、十二名と十一名であった。何故来たかわからない、聖書を持っていると答えた人が、八五名と二二二名

読んでみたい人が六六名と一三五名、もつと知りたい人が、四〇名と九七名とある。尚、はじめての人が六・七割という事であった。

記名制なので後日各教会に氏名を紹介したいと思う。

(尚もつと詳しい報告は割愛させていただきます。折あらば報告します。)

編集部

特集——一九八三年四旬節司教教書

本物の信仰者への道を求めて

「信仰共同体を生かす真の対話
特に小さき人びとと結ばれて」

京都司教 ライムンド 田中 健一



聖なる四旬節を迎えるに当たって、主において、心からの挨拶と祝福の念をこめて、この司教教書を送ります。

キリストのみ教えの根本は福音宣教であります。それと切り離すことの出来ない真の対話の見直しとその実践に、キリストを頭とする信仰共同体として道を歩みましょう。

今回、対話、特に弱い立場におかれている人びととの対等な出会いを強調させて頂きたい理由は、次に掲げる諸点によるからであります。

①私たちの京都教区ビジョンの根本精神が、まず対話することにあるからです。

②今年は、国際コミュニケーション年に定められているからであります。

③教皇様は、今年の正月元旦、第16回世界平和祈禱日に「平和のための対話」と云うテーマでメッセージを送られ、又、今年をキリストによる全人類贖いの死とその復活の一九五〇年目に当たるとして、対話、贖い、和解、刷新のための特別聖年に定められ、世界司教会議（シノドス）も「ゆるしと和解の秘跡」について準備を進めているからであります。

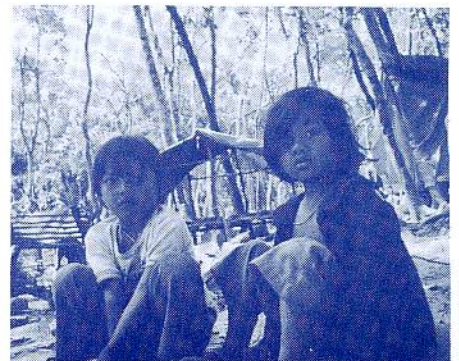
真の対話について考える前に、現代社会におけるコミュニケーションの技術効果は、格別の発展を遂げ、多くの恵みを人類に与えておりますが、これは両刃の剣であって、人心を人為的に、操作し得る恐ろしい代物であり得る点について、注意を促しておきたいと思ひます。

さて本論に入りますが、教区ビジョンの宣言文の中に「教会は自己刷新なしには十分に、その使命を果たすことは出来ない」と述べ、その第一は、対話における自己刷新であると云っております。

キリストは「神の国は近づいた、改心して福音を信じなさい」(マタイ4・17)と云うみことばをもつて、救いの宣教を始められました。神の国とは、神の愛と恵みに参与し、それに生きる神との交わり(コミュニケーション・コミュニケーション)を意味するものであります。改心とはまさに、神に向かい、神と立合い、神と対話し、神に立ち帰ることであり、信仰とは、神との一致に生かされることであります。

では対話に必要な要素とは何でしょうか？

それはまず、自分の心を開き、相手の思いに聞き入ることだと思ひます。キリストは「心の貧しいものとなって心を聞かねばならない」(注マタイ5・3)とおっしゃっています。



次に、相手を一人の人格者として同等な立場に置くことであります。キリストには天より下り(エンマニエル 私達と共に在す神)(マタイ・23)となつてくださいました。しかし、この平等性は、相手と同じ立場に立つだけではなく、相手を理解し、尊重し本当に大切にすることを必要とします。これには心からの謙虚さが伴わねばなりません。

第三に、対話が成り立つために、自分の中に献身的な愛の芽を頂いていることが必要と思います。献身とは、相手を大切にし、それと同じく大切な自分を、相手のために捧げていく態度であります。対話は更に、相手を決して裁かず、受け入れ、包み込み強制したりいたしません。

さて、私達の対話の中心には、何時も主キリストが居てください。主は私達の中に宿られたまひ、神と人との対話そのものでいてくださいます。(ヨハネ序文、三位一体の神によって集められた私達の信仰共同体にとって、対話の心は、必要欠くべからざる根本精神だと思います。それはキリスト御自身が対話そのものでいらつしやるばかりでなく、この心なくしては、キリストの共同体に、真に留まることが出来ない程大切だからであります。

対話を障げるものとして、次のようなものをあげる人がいます。

一人勝手に話しまくること、何も話さないこと、論争や討論にのみあけくれること、自己弁護に終始し、相手を理屈や、世の習わしによって束縛すること、心を閉じてしまつたり、うるさく相手に干渉することなど。その様なことが、私たちの信仰共同体の中にあるならば、大いに反省を、祈りのうちにしなければならぬと思います。この様な誘惑は、案外自分が教会の中で、熱心な信者だと思つてゐる時に陥る危険だと、注意しなければなりません。

次に信仰共同体について考えてみましょう。

ビジョンの宣言文の中の「社会に開かれた共同体」というところに、焦点を合わせたいと思います。

昨年10月、私は日本の教会を代表してアジア司教協議会連盟(FAB

C)第三回総会に参加させていただきました。が、これもアジアにおける信仰共同体の対話の場であり、そのテーマは「アジアにおける信仰共同体としての教会」でありました。(尚総会の声明文は、カトリック新聞82年12月5日号から連載されております。)

確かに対話なくして福音宣教はあり得ず、真の信仰共同体なくして、信仰者としての自分を成長させることは出来ません。そして信仰共同体において最も大切なことは、神と人との、また人と人との対話であるということが出来ましょう。

さて、この信仰共同体の生活の営みの中で、切り離せない三つの柱と申しましょうか、軸のようなものがあります。

その一つは、聖書や教えの分ち合いを通して、信仰を深め伝えていく事。その二は、祈り(特にミサを中心にした)典礼を共に祝うこと。

その三は、このすばらしい信仰の恵みをそれぞれ異つた日常生活の場を通して分ち合うこと。特に苦しむ人、貧しい人、弱い立場に置かれてゐる人と共に福音の心で、関わりを持つことが大切であると思います。そしてこの三つの関係は、その一つが欠けても、他がだめになるほど深い関係にあります。(尚この点についての解説は、教区時報で取扱われることと思ひますので、ここでは割愛させていただきます。)

ところでこれら三つの使命は、聖職者の特権というよりむしろ、信仰の道に召された私たち、神の民全体の特徴であり、責任だと思ひます。

教区ビジョンの流れをたどつてみますと、私たちの信仰共同体が共に目ざす方向は、教会の中、社会の中にあつて、聖書の表現をかりれば、小さな人と呼ばれる人々にあります。そして、ただ彼らに目を注ぐだけでなく、その人々が信仰共同体の中心にいて頂かねばならない、ということにあります。例えば此処に、一人の障害者の方が居られるといたします。すると、私達は彼をお客様扱いにしたり、慈善の対象にしたりします。しかし、彼は信仰共同体にあつては、お客様ではなく、家族の一員であり、中心であるべきだと思います。

聖書が語るキリストの心は、常に弱い立場に置かれている人びとに向けられておりました。そしてキリストはまた、このような小さな人びとの中に生きている(注マタイ25・31)と云われます。もし私たちが「キリストによって、キリストと共に、キリストの内に」と心から祈るならば、考え直さねばならない点が、たくさんあると私自身に云い聞かせています。

又その時、私たちがどうしても忘れてはならない反省点がもう一つあると思います。すなわち、何故この人びとは、このように弱い立場に置かれているのか。彼らの声なき声を聞き、その人達に対して私たちが、間違った態度を取っていないかったか。そういった事に気付き謙虚にゆるしを乞うなら、その時はじめて、私たちが求めている対話、心の交わりが始まるのではないかと思います。

私たちが間違いに気付き、改めるために頭を下げることは、決して自分の威厳を傷つけるものではないと思います。あの偉大な教皇ヨハネ23世も世界にひざまづかれました。この謙遜な心が、第二バチカン公会議の根本精神であったと思います。

以上のことを申し上げながら、私はみなさんの中には、具体的な生き方を、それぞれの現場に合わせて、それぞれの努力を払っておられることを教区時報の報告などでよく存じあげております。それがみなさんの証しの生活の「氷山の一角」だと思っており、喜びと感謝を述べると共に、みなさんと一緒に働き給う聖霊のみ業を賛美したいと思います。

そういった色々の努力を互いに尊重し、場合によっては、ゆっくりとでも立ち留まらず、助け合い、包み合うことを改めて確認したいと思っています。

これらのことを充分に考慮した上で、みなさんに特にお願いしたいことが幾つかあります。

- ①四旬節、愛の献金への寛大な犠牲的ご協力をお願いしたいこと。
- ②難民定住についての関心と理解をいただき、可能な対策と取り組んで

いただきたいこと。(これについては、83年1月6日付、カトリック新聞から日本司教団が、FABCとともにアッピールを出しています。)

③平和旬間(8月6日～15日まで)に向けて、真の平和問題と取り組んでいただきたいこと。平和のために祈ることは勿論ありますが、この問題の根底に流れる人間の尊厳、平等性、正義、愛、自由、真理について普遍的な道を現状把握、情報分析、決断行動といったように、聖霊の導きを仰ぎつつ進みたいと思います。

最近、司祭修道士の中にも、シスター達の中にも、教区の信仰共同体の一層の一致の願いと、足りなかったことへの反省から、興味あるグループが生まれています。全くの自発性からではありませんが、祈りと断食とを自由に選びながら、信仰共同体としての意識の高まりを求め、その輪を、神のお望みに委ねて広げていこうとしております。

はかり知れない神の慈しみによって導かれる神の民、その群の一致の要めとして召されている不肖私は、救いの歴史で示された神の忠実さを重ねて体験させられる次第であります。

この上なく大切な信仰共同体の協力者、仲間である司祭、修道者、学生、信徒のみなさん一人一人の上に、神の豊かな祝福を、お送りいたします。

一九八三年二月十六日 四旬節灰の水曜日

特別聖年の開幕を前にして



司教様のお声で四旬節司教教書のテープをつくりました。貸出し御希望の方は教理センターまで、四旬節第一主日の教会での朗読にも御利用下さい。

キリストの共同体

(聖書に聞く)

今年は国際コミュニケーション年と云われ、マス・メディア(情報伝達や広報機関)の意義を考え、善用する様に定められた年と云えるでありましょう。

実に今日、これらの機関を通しての交流を無視して人間関係は語れない程、深い影響を及ぼすに至りました。情報機関は、現代の恵みでありますが同時に大きな弊害も生み出し始めました。例えばこの報道の如何によって真実が左右されるという危険が、送り手の中にも受け手の側にもあります。はるか地球のかなたの出来事が、わずか数秒の中に知られるという事は、人と人との交流を近めた様でかえって疎遠にした様でもあります。種々の問題をかかえながらも、福音宣教の一つの手段としてこういった報道機関を無視する事が出来なくなりました。

さて、当時報はそういった事の重要性も十分加味した上で(かく云う、時報もその広報手段の一端を担うものですが)コミュニケーションの本来の意味、そこではむしろ対話や出会いという言葉であらわされる、人間性の深い関わり、一致交流といった面について注目し、その様な観点に立つて教会内の種々な交わりのあり方について探ってみたいと思います。

キリストの願いは、私達が一つになる様にと云う事であり、キリストにおける信仰共同体を作りあげる事でありました。ではまず信仰共同体において何が大切

にされているかを聖書によって、探ってみましょう。

まず、キリストによってたてられた共同体は、一、典礼の場に来る共同体。二、復活の福音を告げ知らせる共同体。三、この福音に具体的に生きる共同体であります。別の言葉で云うと、一、同じ食卓にあつて祈りとパンを分かち合う共同体。二、その共同体は神のみことばと教えを分かち合い、特にその主の死と復活の福音を告げ知らせる使命をもった共同体。三、これを日常生活の中において実践していく共同体であります。図にすると次の様になります。

信仰を実践する(生活)

信仰を祝う(典礼)

信仰を伝える(教え)

この三つの教え・典礼・生活における分かち合いは、その内の一つが欠けても、他が成り立たないという密接な関係にあります。

ではこの様な関係を聖書では、どのような箇所から読み取る事が出来るのでしょうか。それは、例えばベタニアの注油の出来事の中に読み取ることが出来ます。この事は、マタイ(26・6)マルコ(14・3)ヨハネ(12・1)に出て参ります。そしてよく似たエピソードは、ルカには罪の女の事件として出てきます(7・36)これらの記事を比較しながら、例えば特にマタイを中心にしてみますと次の様な言葉に出合います。「イエズスは食卓についておられる」「貧しい者はいつ

もあなた方と共にいる」「この福音の述べ伝えられるところにはこの婦人のした事が語られる」という三つの言葉です。

ここに福音の根本的要素、食卓(それは主の晩さんをおこさせ、聖体の秘跡をあらわします)全世界に宣べ伝えられる死と復活についての福音。

「貧しい人、小さい人に特に向けられる福音の実践であります。

実に真の共同体であるためには、祈りと聖体による交わり、福音の分かち合いによる交わり、小さい人々との交わりを通して実現されていく福音の三つの要素が成り立たねばなりません。

尚以上の説明は、ホアン・マシア師の「福音への旅」(あかし書房)を参考にさせていただきました。

さて次にキリストの建てられる共同体は常に小さな人々と呼ばれる人々を中心にしていく事に気がきます。

小さな人々に対して特に注目するのは、ルカですが、例えばルカの次の様な箇所を分析してみるとそれがわかる様な気がします。それは五章です。

四人の弟子の召出し……貧しい漁師不思議な大漁……生活の糧をたたれた人

癩病患者……社会から見捨てられた人

中風の人……自ら動く事の出来な人

レビの召命……社会から軽蔑されている人

共に苦しむ人

キリストは彼らに手をさしのべ、呼びかけていられます。同じ使命に召されている弟子達もまた自分自身そういうものの一人であります。

次にマタイの18章を見ます。それは神の国の共同体について述べるマタイの第四の垂訓と云われる箇所です。そこで問われているのは神の国で誰が一番大切であるかという問いです。それに

対しキリストは幼児を真中に呼びよせます。幼児とは小さい人々と呼ばれる代表者なのです。そのあとの記事に更に注目しましょう。

小さい者をつまづかせるな(5・9)

小さい者を軽んじてはならぬ(10・14)

そして互いにいましめ合い(15・20)

ゆるし合ねばならぬ(21・35)

19章の13・15までのイエズスと幼児達という事を含めて考えると神の国の共同体において大切にされ、中心にされるのは、小さな人々という事ができましょう。

キリストは小さい人々に出会い、彼らを共同体の中心に置き、彼らの中に住わ

れました(マタイ25・31)実に私達の信仰共同体の交わりは、典礼と聖書、そして日常生活における小さい人々との出会いによって果たされると言えましょう。

コミュニケーション年にちなんで

今年一年教会内の種々の関わりについて、特集として取り扱うつもりである。

尚本稿は司教教書のある部分の解説を目ざすものである。なおこの特集の第一回は次頁、マシア師の解説と想っていたきたい。

一つになろう

コミュニケーションへの提言

この間、私は東京から飛行機で米子まで旅行しました。その時、飛行機が富士山の北側を通り、富士山を初めて上から見ることで感動しました。帰りに南側から富士山の別の姿を遠くから眺めることができました。それは新幹線で静岡あたりから眺めていた富士の姿とも河口湖に合宿していた時に眺めたのとも違います。富士山を数多く描いた安藤広重の有名な絵を思い出します。やはり、物事を多くの観点から見れば見るほど、その全体の姿がよく把握できるようになるものです。それは当然のことですが、意外と忘れがちなことです。人は物事を二つの極端な観点から見ても、あれかこれかという二分極の物の考え方をすることが多いのではないのでしょうか。

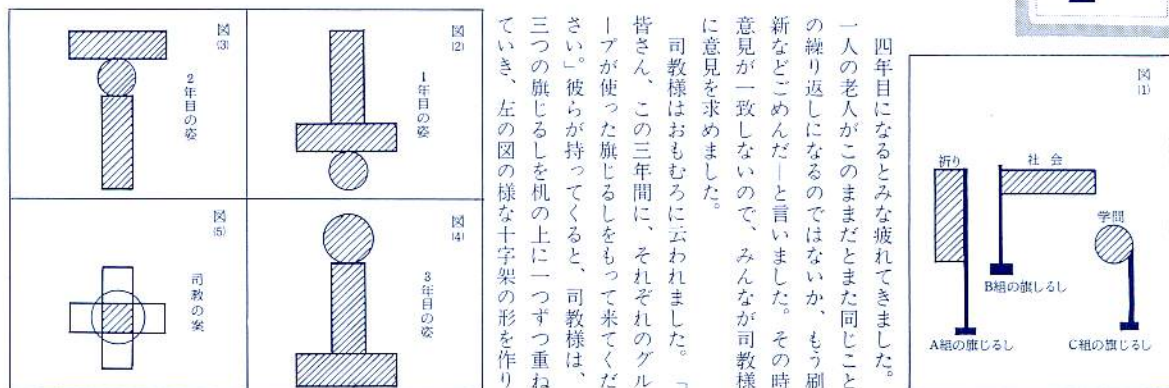
最近ではコンピュータのおかげで、そういったものの見方が強まるのではないかと懸念されています。「白か黒か」「イエスかノーか」とそうでなければわからないというようにものを考えると、人の間の意見の疎通がむずかしくなります。というのは、コミュニケーションは、まさに白くも黒くもないニュアンスをつかんで初めて行なわれるものだからです。教会の中でもこうした問題に直面することがあります。今ここで一つのたとえ話をういて、説明してみよう。

ある教区で、刷新をめざして信徒大会が開かれました。その時、話し合われた内容をうかがうと、信徒が三つのグループに分かれていたことがわかります。それをA・B・C組と呼ぶことにしましょう。A組はこう主張しました。「私たちの教区の刷新を実現するためには、まず何よりも祈りが大切だ、私たちは、これから典礼をいっそうよいものにしていかねばなりません。」それに対してB組が言いました。「祈りは結構ですが、私たちを神との縦の関係だけを強調するのはよくありません。私たちは社会との関わりを忘れてはならず、そのためにも活動することが必要です。」それに対してC組は言いました。「祈りも活動も結構ですが、私たちの信仰の理解を深めなければ、両方とも浅いものになりかねません。」と、こうして下の図のように彼らは三つの旗じるしを立てました。司教様は、彼らのやっていることを黙って、ほほえみながら見ておられました。

一年目、A組の人が会長になり、その後一年間、そのやり方ですることになりました。

二年目はB組

三年目はC組のやり方という事になりました。その間今度も司教様はそれを黙ってほほえんで見ておられました。



「皆さん、祈りか活動か、活動か勉強か、勉強か祈りかといったコミュニケーション的な考えをやめましょう。」

三つの旗じるしが共に重なり合っている所があるのではないですか、ちょうどそのところを強調するところからコミュニケーションが始まります。ただし、重なり合っていない所が残るので、あくまでコミュニケーションのむずかしさが残り、十字架の苦しみが残ります。これからみんな手を取り合って、教区内のコミュニケーションをよりよいものにする様努力しましょう。

このたとえ話で表した問題に答えるため、故パウロ六世は「福音宣教」という文書の中で三角形のような教会観を描き、信仰者の行動と祈りと信仰の理解との調和を強調なさいました。このことについて拙著「福音書への旅」(頁一一一—一二〇)で簡単に説明しておりますが、教会は使徒行録の中でルカが描いている様に源泉に戻る必要があります。祈る事、社会の中で信仰を実践すること、信仰の理解を深めることは、決して関係ない三つのものではなく、その中の一つを除くと他の二つが成り立たないほど緊密な関係にあります。この事を忘れると、刷新は一方的になり、極端から極端に揺れ動く教会になってしまいます。その結果、人は疲れ刷新を求める事もなくなり、教会内の円滑なコミュニケーション作りにもつなげたいものです。



聖霊の力で

教皇様は、'83年が聖年でありイエズス・キリストのもたらした救いの記念の年と宣言なさいました。これは私達信徒一人一人にとつては勿論、すべての信者でない方々にとつても素晴らしい恵みです。神様は聖パウロを通して、自分の救いについての素晴らしいビジョンを宣言しました。「神は、すべての人が救われて、真理を深く悟るようになることを望んでおられます。神は唯一であり、神と人の間の仲介者もまた、人であるキリスト・イエズス、ただ一人です。彼はご自分を全人類の贖いとしてお捧げになりました。」(1テモテ2・4-6)

私達はそれをよく知っています。知識

は大事ですが、然し行動に移らないなら役に立たないのです。使徒達は3年間イエズス様と一緒にいてから少しずつ行動に移る時期になりました時に、イエズスは「わたしからかかえて聞いていた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは、数日のうちに聖霊によって洗礼を受ける」また「聖霊があなたがたの上に降るとき、あなたがたは力を受けて……わたしの証人となる」(使1・4-8)聖霊の力によってイエズス様の使徒達が人々に救いを与えたのです。私達は先ず聖霊を豊かに受ける為の事をし、また聖霊に従って生きるよう頑張るべきです。(ノエル・レサール師)

岩滝教会

岩滝教会創立三十周年を迎えて、神なる主がこの三十年間になし給うた事を、今静かに振り返り、主のみ業を岩滝共同体の皆様と共に賛美し、喜びを分かちたいと思います。

御存じのように、明治十八年十二月、バリー外国宣教会のルイ・ルラープ神父様の来

日から、十一年目の明治二十九年五月、宮津教会洗者聖ヨハネ天主堂が献堂され、丹後に神の国の種蒔きが始まりました。岩滝では戦後、石田の山添定吉氏宅(現在の山添進氏宅)に集会場を開き、宮津より神父様に来て頂き本堂に家族的な集いの中で、厳かな祭儀が行われていました。(まだ信徒で無かった私も一度だけ出席しました)

こうした中で、岩滝町にもカトリック教会があつても良いではないかと、時の町長(亡)嶋田暉三氏が町議会に提案し検討され、岩滝町の町民がたとえ一人でも二人でも神に救われるならば良いことだと衆議一決、町の協力を得て(土地の買収、埋立)建設が始まり、昭和二十七年十二月十五日、古屋司教様により献堂式が行われました。

その頃は近所に家もあり無く、私たちの美しい? 教会にする為に、どんな木でも草花でもと、リヤカーに鎌やスコップを積んで多くの家々から戴いて来ました。又、庭を区画割にし、それぞれの受持の花壇を作り良き土地に落ちた種蒔きのたとえ話のように、良い土地にする

為にと推肥まで運んで来ました。

こうして一本の木にも、一つの草花にも、すばらしい神の愛を見ることが出来ました。薪ストーブを囲んで、Xマスの準備のために夜の更けるのも忘れていたことも思い出されます。

教会にはオルガンも無く(山定さんからの借物でした)。「教会は、岩滝町みなさんのものです……」との神父様の命令で、町の有力者の方々に寄付をお願いに廻った夜。

又、ある時は神父様のジープのスプリングが折れるかと思う程、多くの人が乗って歌をうたいながら、各教会めぐりの楽しい一日。

映写機を車に積んで、石田区を始め、弓木、岩滝、須津と、映画をして廻った夜。宮津市の畑では道をまちがえて上世屋まで行き、車のバックする所も無く、約一時間程遅れて畑に到着。突然、夜空にサイレンが鳴り渡り、村中に映画の始まりを知らせ、子供も年寄りも座布団をかかえて集って来られたのは驚きでした。

創立30周年とレサール師叙階25周年を祝して



た。又、悲しいこともありました。主任司祭チャールス・ブロックルハースト神父様の突然の死。(昭和三十六年三月十九日)

帰天) こうした悲しみ苦しみを乗り越えて、多くの人々が、この教会で育って行きました。

その中には、家族ぐるみで移転された人たち、結婚されて遠くへ行かれた人びと、その方々がさながら初代教会の使徒たちのように、ふるりの教会を離れ、各方面で、今も主と共に働いて居られる事と思います。

私たちも、神からの賜物である一タラントを、地の中に隠したりしないで! 神意情が慎重の帽子をかぶらないで! 神からの賜物を懸命に活用して、隣人に大胆に奉仕して行くことはありませんか。あなたは、どのような実を結んだのか?と言われないように。

誰一人欠けることも許されない、私たちの、この岩滝の共同体が、いつも聖霊に導かれて、益々発展して行くことを祈りながら……。

(信徒会長 糸井英雄)



小教区の枠をこえて

松本三朗師

昨年十二月号の「タマスコ途上」で、I・K氏が述べられている小教区制度とそこでの人間関係のご意見に関連して、一言触れさせていただきたいと思っています。パウロの手紙に生き生きと画かれているように、初代の、特にパウロの育てた教会は、多様な人々が多様な個性や才能

・与えられた恵みなどによって(パウロはそれをカリスマ―霊の賜物と呼んでいます)いろいろな役割を分担しつつ共同体を形づくっていたようです。パウロは使徒、預言者、教師、宣教師、牧者等20近くの役割をあげています。

このような教会には一方では生き生きとした信仰の自覚性と、他方では熱狂から生じる混乱もあったようです。人々の心の中に燃えている聖霊の火を消すことなく、こうした混乱を秩序だてようとしたのが、パウロにコリント人への手紙を書かせた動機の一つだと、聖書学者たちは言っています。このような多様なカリスマに満ちあふれた教会の姿は、六世紀以後制度化されて行く教会の中で、次第に消えて行きました。多様なカリスマと

それに従って分担された種々の役割は皆、司祭の上に集中して、やがて聖職者と平信徒という二つの役割だけが教会に残り、しかもこの役割は次第に身分となってしまいました。(このことは、元来信徒の役割であった。守門、読師、侍祭、副助祭といった奉仕職が、司祭になるまでの前段階となつてしまつていた状況に明らかに見えます。第二バチカン公会議以来の教会の目指す方向の一つは、このように司祭に集中しすぎた責任と権限を分散し、元来信徒のものであった役割を信徒の手に帰すことであり、皆で共同責任を負つて行く教会を作つて行く事にあると思われまふ。

こうした方向性を考えるとき、もともととフランク王国(千二百年前)の私有教

もぐらの寝言

明けましておめでとうございます。今年私の年だという事でして、普段加害者として、いろんな意味で嫌われている私達の事を思い出して下さると聞き感謝にたえません。忘却される事は最も苦しい事だと述べた方もありましたとか。

ある寓話

いのしし族の対話

何でも今年はコミュニケーション・ン年とかで、私達イノシシ科に属する一族も、ここで結果して話し合いの場を持つととうと招集をはかりましたところ、何の権利があつて私達に命令するのか。量においても、有益さにおいても我々の方が中心になる筈だとブーブー申すものがあります。そこでイノブタ氏があらわれ、

ブーブー、ゴーゴー、まとまとところがありまへん。その争いを岩場の陰でおそろおそろ聞いていた羊が、どうも黙いたと見え、勇気を奮つて出て来てこんなことを申します。私の主人は、自分達の間で分かれ争う国は滅びるといわれ、又ユダヤ人からも異邦人からも嫌われ軽蔑さ

れていたサマリア人を大切にした。ところであなた方は自分達が本家本もとだと、自分達の方が正しい。自分達の方が有益な存在だと主張し合うだけで、互いに相手の事を理解しようとせず、傷つけ合うだけでは何が仲間ですか、何が同じ家族ですか。私の主人はこんな風に申すんです。人のため生命を捧げる程の愛はない。結局あなた方は人間にとらえられ彼らを生かすために、自分を捧げる事に生きがいを感じ互いを尊敬し合うべきではないんでしょかね。こういうところにかへりました。イノシシ村の一族に對話と協調が生れたか知りませんが、みなさん教えて下さい。

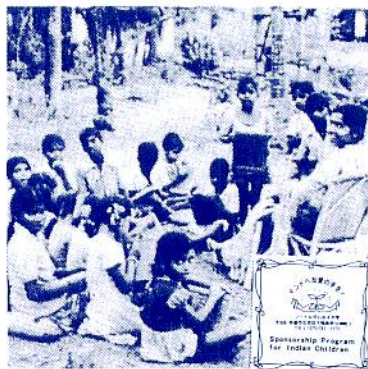
(M・T)

会の制度から発し、中世の荘園制度と深く結びついて発展、固定化した小教区の制度などは、現代の社会事情にそぐわないばかりか、しばしば弊害にさえなっています。特に日本人の文化ということを考慮するとき、縄張り意識や、たて社会の人間関係など、責任分担、全員参加の教会を目指すのにマイナスイメージとなりやすい事も考えねばなりません。

今すぐ小教区の制度を変えるというわけにはいかないでしょうが、小教区の枠を越えた連絡協力を促進すること、教会内では司祭と信徒、信徒同志の対話をもっと密にすること、縄張り意識やオラガ教会という意識を越えて、他教会、他グループの働きと交流、協力することなどから、しだいに小教区制度にかわるものを生み出す土壌をつくる必要があります。

また小教区制度と結びついた主任司祭のイメージも、キリスト教国の中で出て出来上つた教会を管理、運営する人という面が強いのですが、宣教師日本では司牧者、管理者であるより、宣教師であることの方がより重要でしょう。

既成の枠組を越えて、現代の日本の教会で、どうやって福音宣教を行動で実現し、一人でも多くの信徒の才能や意欲を活用して、生きた教会の姿を証しするか。それには新しい発想方法とともに、あえて不安な未知の道に踏み込んで行く勇気が必要であると思います。混乱を恐れるあまりに聖霊の火を消している。それが現在の教会ではないでしょうか。



日本の教育施設で英語と英会話の教鞭をとる外国人修道者は少ない。世界との対話の共通語のひとつ英語の教師をしながら、インドへ友愛の手を。運動を展開、それを通してキリスト者、宗教と関りのない人々にまで「平和を分かち合う」精神と、キリストの視野を根づかせているシスター・ジョン・シュミットをご紹介します。

シスターの所属はノートルダム教育修道女会。一九六五年に来日。ノートルダム女子大学(京都)で七年来、英語教師として教鞭をとっている。七七年インドで女子修道者会議が開かれ出席、インド人のシスター達に、インド南西の海辺の貧しい村、ホナワと附近の五つの島を紹介されて、この運動展開の機会に恵まれた。貧国の悪循環は五、六才の子どもも労働力に駆り立て、村々に学校はあってもココナツ織維の縄作りに縛りつけるこの地域の実情。貧困が単純に、人々の怠惰から生じるものでないことを、



社会と共に歩む人物記(7) 愛は行いによって証明 Sr. ジョン・シュミット (ノートルダム女子大学)

自分の眼で確かめることができたシスターは、ルカ9・13のキリストの言葉を思い出した。「あなたの方の手で食物をやりなさい。」そして使徒たちのパン五つと魚二ひきとがキリストに祝福されて群衆に配られたことを……。

社会から貧困をなくするのに、国、大きな組織の対策に待つのではなく、キリストは、あなた自身が始めなさい」と言われているのだと感じた。「愛は行いによって証明される」と信じるシスターの行動は、具体的にあり敏速であった。自分の周りの人々にも、この様な意識の日

覚めには、ホナワのスライドの上映、講演を通しての貧困を知ってもらう機会が必要とばかり、婦人会、小教区、学校等云われれば何処へでも出かける。子ども達に教育を与え、住民達に自覚の道を導きさせるこの運動は今や驚く程の広がりを見せている。

子ども達の教育の為に計画されたスポンサーのプログラムは、一ヶ月二、〇〇〇円。援助金は子どもが学校に行くと労働力をとられるので、その補いとして家庭に渡され、また、学用品、医療費、貧しい食費にも使われる。現地の子どもたちは教会を教室として小学校教育を受け

ている。スポンサーは京都教区内は勿論北は福島の桜の聖母短大、中高校、南は九州の都城、明治学園のあたりまで反響が大きく、各地から援助金が続々と寄せられている。現次点では、やがて子供達が成長し、大きな島の村にある高校に行くようになった時に使われる社会福祉センターの建設が進められている。同センターでは職業訓練クラスや集会・学習のための集会所も計画され、三千万円の資金集めにシスターは懸命である。

インドへ友愛の手を。運動は献金だけでなく、シスターの教え子たち、大学生をインドに連れていっ

たりして、アジアの中で日本がどんなに恵まれているか、平和のうちに生活しているのかの見直しをしよう意識向上にも注意がはらわれている。

まだシスター・ジョンが小学生の頃、戦後の日本で学校設立のため、資金集めのノートルダム修道女会のシスターに会ったことを思い出しながら「今度は恵まれている日本人たちがアジアの貧しい人達を援助する番です」というシスター・ジョンの顔は明るい。大校舎の一隅の小さな部屋は、「インドへ友愛の手を」運動の事務所にあって行われている。同僚のシスター、職員、学生たちが自分の時間のあいている時に訪れて、事務的な仕事のお手伝い。現地訪問、スポンサー、ボランティアになるのもホナワと共にある心になるとはシスターのことは。(Y)



時報が対話 おう」書く
の手段なら 者も読む者
は「互いに も、投稿者
心を開けあ も編集者も

◆閉館まぎわ、鍵しめますよ、大急ぎで書きます。ここではやさしい人々が待つてくれます。あそこ、天国では待つて下さるでしょうか。おやさしい神さま、ちよつと待つて下さい。あわれみを乱用するつもりはありません。でもあなたは気長な方です。ありがとうございます。(M・T)

◆異変といわれる程のこの冬の暖さ。それだけに急に冷えこむとたまりませんね。北海道のヒクマ、中川氏逝くと報じられてビックリ。人生、追いつけ、追い越せのスピードで行かざるを得ない時もあるけれど、キリスト者はキリストの樂天でこの一年歩みたいですよ互いに(Y)

◆多難と云われている一九八三年。緊迫感があるように全く実感としては湧かないこの一年を、私たちはどのように対処していくか。一方では国際コミュニケーション年とされている。全ての人が、それこそ、開心心を開いて語り合い、協力し合い、助け合う年であってほしいと願う。(人)

本紙を福音宣教に役立たせるため、ご近所、お友だちにもお見せ下さい。